リスト1　医学中央雑誌検索結果

【#0039】

TI: 【冬の食中毒】ノーウォーク様ウイルスによる集団発生

AU: 西尾治, 新川奈緒美

SO: 日本医事新報 4105 号 Page5-9(2002.12)

AB:

【#0040】

TI: 腸管出血性大腸菌と溶血性尿毒症症候群 腸管出血性大腸菌と溶血性尿毒症症候群の疫学

AU: 里村憲一

SO: 日本小児科学会雑誌 106 巻 12 号 Page1859-1864(2002.12)

AB: 1996 年 7 月に大阪府堺市の小学校で給食を原因とする大規模な集団食中毒が発生した.その調査研究で得られたデータを中心に解析を行った.堺市における集団食中毒の腸管出血性大腸菌感染症患者数は 9492 名と推定された.原因とされた食品を食べた児童からの平均発病率は 34.2%で,低学年児童の発症率がより高率であった.又,家族内における二次感染者の割合も乳幼児が中学生以上の年代より高率であった.日本小児腎臓学会の基準を満たす不完全型溶血性尿毒症症候群(HUS)は 79 例,完全型 HUS は 42 例で 3 例が死亡した.多発校学童の HUS は 106 例である為,一次感染者の HUS の発症率は 13%と推定された.白血球数増加,血清総蛋白濃度の低下,CRP 上昇,血清ナトリウム濃度の低下等が HUS 重症化の危険因子と考えられた

【#0041】

TI: 広島地方における魚介類による食中毒

AU: 前田ひろみ, 土井奈津美, 東岡英実, 鎌田俊彦

SO: 看護学統合研究 3 巻 2 号 Page57-70(2002.03)

AB: 広島地方における食中毒の状況を質問紙法で調査し,食中毒の原因食品と原因物質について考察した.その結果,魚類よりも貝類による食中毒の方が多かった.原因魚類ではサバ(40.4%)が最も多く,ハマチ,イカの順番であった.原因貝類ではカキ(77.6%)が最も多かった.発生月は夏季が多く,調理方法は刺身・寿司(59.7%)が多かった.これは腸炎ビブリオ食中毒と思われる.貝類は,冬季のカキが原因の小型球形ウィルス(SRSV)食中毒と考えられる.調理方法は酢の物が最も多かったが,加熱調理したカキでも食中毒が発生している.調理・摂取場所は家庭が最も多かった.症状は下痢,腹痛,嘔吐,発熱であったが,カキの食中毒の場合は嘔吐が特徴的であった.近年の広島湾は下水汚染が進行し,糞便由来の病原細菌や SRSV による魚介類の汚染が起こっている.夏期の魚類及び冬季のカキ類の生食をできるだけ避け,加熱調理する場合にも十分な注意が必要である

リスト1　医学中央雑誌検索結果

【#0042】

TI:　新しい食中毒原因菌　Providencia alcalifaciens

AU:　本田武司

SO:　Medical Technology31 巻 1 号 Page6-7(2003.01)

AB:

【#0043】

TI:　学校医に関するアンケート調査

AU:　芳賀惠一，土田秀二，横山新吉，中井伸一，山形県小児科医会調査研究班

SO:　日本小児科医会会報 24 号 Page129-133(2002.10)

AB:　山形県小児科医会会員 81 名と県内全小学校 344 校を対象にアンケート調査を実施し,医会会員 63 名と小学校 274 校の回答結果を報告した.小児科医が校医を担当している小学校は16%であり,殆どの校医を内科医に依存していた.学校医の職務執行準則 9 項目への校医の関わりについて学校の認識との間に際だった相違はなかった.双方の多くが関わり合うとした項目は,児童の健康診断,就学時健康診断および職員の健康診断,学校伝染病予防に関する指導と助言および食中毒の予防措置,健康診断結果に基づく疾病の予防措置と保健指導であった.一方,学校検診や心の問題に対して校医は殆ど関与していなかった

【#0044】

TI:　HACCP,その後　厚生サイドから見た HACCP の進展

AU:　山本茂貴

SO:　日本食品微生物学会雑誌 19 巻 3 号 Page96-99(2002.11)

AB:

【#0045】

TI:　児童・生徒を対象とした衛生講習の効果について

AU:　高橋広志，八重樫良，生駒隆一，相原美智子，齋藤節子，鐙屋公雄

SO:　東北公衆衛生学会 51 回講演集 Page40(2002.07)

AB:

【#0046】

TI:　ストレス蛋白(HSP70)によるボツリヌス毒素 A 傷害からの生体防御効果

AU:　伊藤要子，石口恒男，綾川良雄，池野有子，杉浦富美子

SO:　日本臨床生理学会雑誌 32 巻臨増 Page103(2002.11)

AB:

リスト1　医学中央雑誌検索結果

【#0047】

TI:　A 型肝炎患者より派生したと思われる食中毒事例の追跡調査　A 型肝炎ウイルスの遺伝子を指標とした検討

AU:　猿渡正子，野田伸司，所光男，日置敦巳，青木聡，安江智雄，大平恵美子

SO:　感染症学雑誌 76 巻 9 号 Page791-792(2002.09)

AB:

【#0048】

TI:　SRSV 食中毒に続発した感染症事例と二次感染の防止に関する検討

AU:　堀切敏，宮川幸二，清沢哲朗，白石寛子，小林文範，佐藤彰一郎，佐藤守俊

SO:　食品衛生研究 52 巻 11 号 Page65-72(2002.11)

AB:　同一施設での SRSV による食中毒とその後に続発した同ウイルス感染症事例に遭遇し,集団発生時の疫学調査及び二次感染の防止に関して検討した.SRSV による食中毒と感染症の鑑別を行い対応することができた.SRSV は食品以外にも様々な感染経路をとることから,食品衛生監視員は従来の食中毒調査に加え,感染症(二次感染も含めて)としての対応もできるよう調査を行うことが重要であった.日頃から営業者に対し二次感染の防止対策を普及啓発していくことや,患者発生時には具体的な施設等の消毒方法に関し,適切な助言・指導を行うことを心がけておく必要があった

【#0049】

TI:　リアルタイム定量(TaqMan)PCR 法によるガス置換包装鮮魚のボツリヌスリスク評価

AU:　木村凡，田島洋介，森恵子，藤井建夫，田中幹雄，広瀬和彦，小林美佐子，白井勝久

SO:　日本食品衛生学会 83 回学術講演会講演要旨集 Page26(2002.04)

AB:

【#0050】

TI:　食中毒発生状況の傾向分析

AU:　柳本正勝

SO:　日本食品衛生学会 81 回学術講演会講演要旨集 Page18(2001.04)

AB:

【#0051】

TI:　動物性食品の安全性確保

AU:　森田邦雄

SO:　日本食品衛生学会 79 回学術講演会講演要旨集 Page12(2000.04)

AB:

リスト1　医学中央雑誌検索結果

【#0052】

TI:　分子疫学的手法に基づいた食中毒の監視体制　パルスネットの構築

AU:　渡辺治雄, 寺嶋淳, 泉谷秀昌, 伊豫田淳, 田村和満

SO:　感染症学雑誌 76 巻 10 号 Page842-848(2002.10)

AB:

【#0053】

TI:　【総合衛生管理製造過程の現状と課題】 最新の HACCP 事情

AU:　山本茂貴

SO:　空気清浄 40 巻 3 号 Page185-188(2002.09)

AB:

【#0054】

TI:　近年における食中毒の変貌とその対策　食中毒対策のツールとしての微生物学的リスクアセスメント

AU:　春日文子

SO:　日本獣医学会 134 回講演要旨集 Page110(2002.08)

AB:

【#0055】

TI:　鶏肉及び食中毒患者から分離された Salmonella Enteritidis の分子疫学的解析

AU:　金子誠二, 石崎直人, 宮崎奉之, 楠淳

SO:　日本獣医学会 127 回講演要旨集 Page155(1999.03)

AB:

【#0056】

TI:　日本における食中毒発生の傾向分析

AU:　柳本正勝

SO:　食品総合研究所研究報告 66 号 Page1-8(2002.03)

AB:　食中毒発生の動向を的確に把握すること目的に,食中毒統計データを用いて経年変化を経験ベイズ型平滑化法で解析した.その結果,患者数は変化が認められないが,事件数は近年激増し,死者数は急激から近年は増加気味と変化していた.病因物質としては,細菌が増加しており,特にサルモネラ属菌と病原性大腸菌が増加していた.原因食品では具体的な食品で増加しているものはなく,その他の項目だけ増加していた.原因施設として,飲食店,旅館が増加し,減少していた家庭,事業所も近年は増加していた

リスト1　医学中央雑誌検索結果

【#0057】

TI:　兵庫県における薬毒物対応システム整備のための実態調査(第 3 報)

AU:　吉永和正, 丸川征四郎, 切田学, 久保山一敏, 上野直子, 大家宗彦, 細原勝士

SO:　神緑会学術誌 18 巻 Page8-12(2002.08)

AB:　兵庫県の救急・集中治療施設 10 病院を対象に,薬物中毒対応システムの実態調査を質問形式で行った.その結果,7 病院から回答が得られ,中毒症例の総数 386 例,入院総数 198 例であった.中毒物質別では医薬品中毒 116 例,急性アルコール中毒 34 例,食中毒 16 例,その他工業用品,覚醒剤,マリファナ,自然毒中毒等であった.重症例は 93 例(医薬品 69,アルコール 17)で,死亡例は 5 例(農薬 1,工業用品 2,医薬品 1,アルコール 1)であった.救急入院における中毒の割合は 1.1～7.1%であった.解毒・拮抗薬使用は 11 例(農薬 3,医薬品 8)で入院の 5.6%であった.自殺企図症例は 50～68.7%であった.重症度判断の適否,自殺企図症例の追跡等の面からも登録に基づいた中毒症例の把握と解析が今後の課題と考えられた

【#0058】

TI:　市内一円で発生した Salmonella Enteritidis 食中毒の集団発生事例-豊橋市,2001 年

AU:　松井珠乃, 鈴木里和, 柴田和顯, 木島秀雄, 瀬尾幸嗣, 塚田真樹, 松橋利奈子, 泉谷秀昌, 渡辺治雄, 大山卓昭, 岡部信彦, 高橋央

SO:　食品衛生研究 52 巻 9 号 Page29-34(2002.09)

AB:　2001 年 10 月豊橋市で発生した Salmonella Enteritidis(SE)食中毒の集団発生事例について,感染源の特定を目的に実地疫学調査を行った.その結果,9 月～10 月迄に発症した SE 症例は計 163 名(中央値 8 歳)であった.豊橋市以外では SE 症例の増加傾向はみられず,症例の発生は豊橋市内のほぼ全域に亘った.年齢別では,乳幼児 36 例,小学校 110 例,中学生 3 例,高校生以上 14 例で 12 名が入院治療を受けたが,いずれも重症者はいなかった.ファージ型(PT)検査は 150 例に行われ,PT1 が 102 例と最も多く,次いで PT47:36 例,PT4:10 例,PT1b と untypable 各 1 例であった.PT1 が検出された小中学生症例 96 例の学校給食を追跡調査した結果,デザートで出された A 食品会社の月見まんじゅうから SE-PT1 が検出された.更に月見まんじゅうで使用された B 鶏卵会社の殺菌未凍結液卵と殺菌凍結液卵より,それぞれ SE-PT47,SE-PT1 が検出され,原因食品を特定することができた

【#0059】

TI:　胃腸炎ウイルスの研究(平成 13 年度)

AU:　濱野雅子, 藤井理津志, 葛谷光隆

SO:　岡山県環境保健センター年報 26 号 Page37-47(2002.08)

AB:　胃腸炎ウイルスの検査に関する三つの研究を行った.一つ目の研究は,ELISA 法又は逆受身赤血球凝集法を用いて感染性胃腸炎患者糞便 210 検体からヒト A 型ロタウイルス(AHRV)とヒト C 群ロタウイルス(CHRV)の検出を試み,電子顕微鏡(EM)検査の所見と対比した.その結

果,EM 法でロタウイルス様粒子が観察された検体すべから ELISA 法で AHRV のみ検出され,ELISA 検査に用いたモノクローナル抗体 13A3 との反応性が低い CHRV は検出されなかった.二つ目の研究は,国内で検出された CHRV 株間の遺伝的関連性を明らかにする目的で,1984～2000 年に全国各地で分離された集団胃腸炎由来 8 株,散発性胃腸炎由来 13 株について,外殻スパイク蛋白(VP8)をコードする遺伝子の比較・解析を行った.その結果,21 株の VP8 相同性は 93.1～100%であり,由来の異なる株でも遺伝的には密接に関連していることが明らかになった.三つ目の研究は Norwalk-like-virus について,逆転写 PCR 法におけるプライマー系(ポリメラーゼ領域の国内検出株由来共通プライマー系と従来のプライマー系)及び増幅領域(ポリメラーゼ領域とカプシド領域)による検出率の比較を行った.その結果,使用プライマー系による差は認められず,増幅領域別の検出率は検体が糞便の場合カプシド領域 PCR>ポリメラーゼ領域 PCR,検体がカキではポリメラーゼ領域 PCR>カプシド領域 PCR となった

【#0060】

TI:　岡山県における感染性胃腸炎起因菌の流行疫学調査　患者等由来株の各種性状と疫学解析

AU:　中嶋洋, 狩屋英明, 大畠律子, 日笠芙美子

SO:　岡山県環境保健センター年報 26 号 Page29-33(2002.08)

AB:　平成 13 年度に岡山県下で分離された志賀毒素産生性大腸菌(STEC)株とサルモネラ菌株について疫学的解析を行った.STEC の血清型は O157:H7 が 79.1%と多く,次いで O26,O111 等が多かった.O157:H7 の中で最も頻度の高い毒素型 STX1,2 の遺伝子型(PFGE 型)は,本年度全国的に流行した「IIa,IIa,I」が多く,diffuse outbreak 関連株である可能性が推察された.ヒト由来サルモネラの血清型は S.enteritidis(SE)が多く,SE のファージ型は 1,1b,6a,14b,36 と多彩であった.S.infantis はヒトとブロイラーから高率に検出され,PFGE 型の一致する株も認められた

【#0061】

TI:　サルモネラによる食中毒の Hazard Characterization

AU:　春日文子, 温泉川肇彦, 和田正道, 広田雅光, 豊福肇, 柴辻正喜, 道野英司, 桑崎俊昭, 熊谷進, 山本茂貴

SO:　日本獣医学会 131 回講演要旨集 Page117(2001.03)

AB:

【#0062】

TI:　鶏のサルモネラ症の疫学と CE 製剤,糖類等の防除対策への応用 Salmonella Enteritidis の養鶏関連施設での分布,及び分離株と食中毒由来株との分子疫学的比較

AU:　村上光一, 堀川和美, 大槻公一

SO:　日本獣医学会 128 回講演要旨集 Page35(1999.09)

リスト1　医学中央雑誌検索結果

AB:

【#0063】

TI:　腸管出血性大腸菌の産生する志賀毒素2バリアントの遺伝子型別法

AU:　黒川忠, 有田富和, 斉藤紀行

SO:　宮城県公衆衛生学会会誌 33 号 Page9(2001.03)

AB:

【#0064】

TI:　【食中毒・腸管感染症】 細菌性腸炎・食中毒　細菌性赤痢の治療

AU:　角田隆文

SO:　Modern Physician22 巻 7 号 Page889-892(2002.07)

AB:

【#0065】

TI:　【食中毒・腸管感染症】 細菌性腸炎・食中毒　腸管出血性大腸菌　細菌学・疫学を中心に

AU:　甲斐明美, 小西典子

SO:　Modern Physician22 巻 7 号 Page877-881(2002.07)

AB:

【#0066】

TI:　【食中毒・腸管感染症】 食中毒の最近の発生動向

AU:　工藤泰雄

SO:　Modern Physician22 巻 7 号 Page835-840(2002.07)

AB:

【#0067】

TI:　基礎講座　感染症　ブドウ球菌食中毒

AU:　五十嵐英夫

SO:　SRL 宝函 26 巻 2 号 Page100-106(2002.08)

AB:

【#0068】

TI:　ノルウォークウイルスによる集団食中毒

AU:　玉木久光, 安保亘

SO:　青森県立中央病院医誌 47 巻 1 号 Page23-26(2002.03)

リスト1　医学中央雑誌検索結果

AB:　修学旅行で温泉旅館に宿泊中の北海道の中学生 100 名(生徒 90 名,引率教師 10 名)中約 90 名が悪心,嘔吐,腹痛,下痢を訴え,そのうち 38 名が救命救急センターを受診,対症療法で症状が改善しなかった 28 名が入院加療となり,そのうち 14 名が小児科入院となった.入院当日夜に 38℃以上の発熱が全例にみられたが翌日には全員解熱し,いずれも輸液等の対症療法で入院 3 日目には症状が改善して退院となった.入院患者 3 名の下痢便が採取でき,3 検体全てからノルウォークウイルス(NV)が検出され,同ウイルスが原因の集団食中毒と推定された.検査したいずれの食品からも NV および有意な細菌は検出されず,入院患者 14 名に対して行った食事調査においても NV による食中毒の原因として報告の多い二枚貝の生食はなかった.入院患者 14 名の検査結果,臨床症状,食事調査等のデータを用いて NV による集団食中毒について考察した

【#0069】

TI:　焼肉用生肉等の汚染実態調査結果について

AU:　和田洋之, 田邉英子, 平山裕子, 中嶋洋, 畑ますみ, 前野幸子, 山口晴生, 深井猛, 旦敏郎, 二宗壮夫, 倉敷市食品衛生業務研究班

SO:　食品衛生研究 52 巻 7 号 Page73-80(2002.07)

AB:　平成 11 年 4 月から平成 13 年 3 月の間に本県で発生した腸管出血性大腸菌(EHEC)感染症について喫食状況を調査したところ,発症前に焼肉を喫食していた例が 39.0%見受けられた.焼肉用生肉及び客が使用した後の箸の細菌検査,EHEO の消長,焼肉店の聞き取り調査等行った.生肉はその部位に拘わらず,糞便由来の食中毒菌に汚染されている可能性があった.生肉に付着して生肉相互,野菜への二次汚染を防止するため,盛り付けの際には生肉を種類ごとに,又,野菜とは別に盛り付ける必要があった.よって,生肉は十分な加熱を行い,生食は極力避けることが望ましい

【#0070】

TI:　「食品に起因した感染症が疑われる患者」の届出に関するエイズ拠点病院担当医師の意識調査

AU:　谷原真一, 中村好一, 柳川洋

SO:　日本衛生学雑誌 57 巻 2 号 Page522-526(2002.05)

AB:　エイズ拠点病院において HIV/AIDS 患者の診療を担当する医師に対して「食品に起因した感染症が疑われる患者」の診断経験及び届出状況,届出を行う(行わない)場合の理由を明らかにすることを目的とした調査を実施した.391 診療科の内,224 診療科から協力が得られた.「全て届けた」と回答した者は 4 割弱であり,残りの約 6 割は診断しても届けなかった経験を有していた.届出を行う理由は「法律に規定されているから」,「大流行を起こす危険があったから」,「重要な疾病であったから」,「隔離が必要な疾病であったから」であった.届出を行わない理由は「孤発例であったから」,「軽症例であったから」であり,他には「病原体検査結果が出た時

には治癒していた」,「病原体が検出された時には既に患者が来院していなかった」という理由が多かった

【#0071】

TI:　わが国の細菌性食中毒発生構造の統計学的検討(2)　原因施設　学校について

AU:　光崎龍子, 鈴木登美子, 鈴木啓子, 森眞弓

SO:　相模女子大学紀要 65B Page23-32(2002.03)

AB:　食中毒発生の患者数が多く,摂食年齢層の低い学校給食の過去 34 年間における食中毒発生状況を病因物質・原因食品により,時間分布,相関分析,主成分分析により検討した.原因食品は食環境の変化が嗜好を変え,給食の献立はその嗜好を反映したことにより穀類から肉類へ,調理も単品よりも複数の食品を混ぜ合わせる等と変化したことにより,病因物質もまた混入し易い環境に変化した.ゆえに,学校給食においての食品管理は,食品の生産環境,或いは微生物の生活環境への関心を高めることにより衛生管理にアプローチできると考えた

【#0072】

TI:　広島県内で分離された Campylobacter jejuni(Penner 血清型 B 群)の分子疫学的検討

AU:　東久保靖, 井上佳織, 竹田義弘, 小川博美

SO:　広島県保健環境センター研究報告 9 号　Page9-12(2001.12)

AB:　1998 年 6 月～2001 年 3 月の間に広島県内の各種動物についてカンピロバクターの汚染状況を調査し,その殆どは Campylobacter jejuni(Cj)であることが判明した.そこで分離された CjB の菌株相互の関連性を解析する為に,各疫学マーカーによる検討を行った.その結果,1)PCR-RFLP パターンは,Table 1 及び Fig.1 に示した.供試 12 株は,Dde1 で 5 種類,Hinf I で 6 種類のパターンを認められた.2)RAPE パターンは,Table 1 及び Fig.2 に示した.供試 12 株は,AP41 及び HLWL85 で 6 種類,AP43 で 7 種類を認められた.3)PFGE パターンは,Table 1,Fig.3 及び 4 に示した.供試 12 種類は,Sma I 及び Sal I で 7 種類のパターンが認められた

【#0073】

TI:　日本の腸炎ビブリオ食中毒 25 年(1975～1999)の変遷

AU:　小川博美, 竹田義弘, 井上佳織, 東久保靖

SO:　広島県保健環境センター研究報告 9 号　Page1-8(2001.12)

AB:　厚生省の食中毒事件録により 1999 年迄の 25 年間に発生した腸炎ビブリオ食中毒 8383 例を対象に本菌食中毒の特性について検討した.年間発生件数は平均 296.1±130.8 であり,月別発生件数は夏期に集中であった.原因施設は飲食店をはじめ,仕出店,家庭,旅館,ホテルなどであり,原因食品は仕出し料理 25.5%,宴会料理 17.9%,寿司 13.1%,刺身 12.5%,その他 31.0%であった.発生原因は食品の二次汚染 18.5%,食材の一次汚染 182%,長時間室温放置 17.9%であった.一事例あたりの平均患者数は 28.8 ± 69.3 人であった.主な原因血清型は

リスト1　医学中央雑誌検索結果

04:KB,22.9%,03:K611.8,04:K638.5%であった.本菌食中毒の予防には,魚介類からの二次汚染の防止,5℃以下での保存,調理後 2 時間以内の摂取が重要と思われた

【#0074】

TI: 【食中毒　腸管出血性大腸菌感染症とノーウォークウイルス性下痢症】 ノーウォークウイルス性下痢症　治療・予防法の進歩　ノーウォークウイルス集団食中毒と小児急性胃腸炎の関連性　本邦での歴史を踏まえて

AU: 鈴木宏, 西川眞

SO: 日本臨床 60 巻 6 号 Page1208-1213(2002.06)

AB:

【#0075】

TI: 【食中毒　腸管出血性大腸菌感染症とノーウォークウイルス性下痢症】 ノーウォークウイルス性下痢症　診断・検出法の進歩　組換え抗原を用いた血清診断

AU: 名取克郎

SO: 日本臨床 60 巻 6 号 Page1194-1201(2002.06)

AB:

【#0076】

TI: 【食中毒　腸管出血性大腸菌感染症とノーウォークウイルス性下痢症】 ノーウォークウイルス性下痢症　疫学　ノーウォークウイルスの分子疫学

AU: 牛島廣治

SO: 日本臨床 60 巻 6 号 Page1143-1147(2002.06)

AB:

【#0077】

TI: 【食中毒　腸管出血性大腸菌感染症とノーウォークウイルス性下痢症】 ノーウォークウイルス性下痢症　治療・予防法の進歩　ノーウォークウイルスワクチンの研究開発

AU: 中田修二

SO: 日本臨床 60 巻 6 号 Page1222-1227(2002.06)

AB:

【#0078】

TI: 【食中毒　腸管出血性大腸菌感染症とノーウォークウイルス性下痢症】 腸管出血性大腸菌感染症　疫学　パルスネット　疫学調査と DNA 解析

AU: 寺嶋淳, 泉谷秀昌, 田村和満, 渡辺治雄

リスト1　医学中央雑誌検索結果

SO:　日本臨床 60 巻 6 号 Page1070-1076(2002.06)

AB:

【#0079】

TI:　Campylobacter jejuni 集団下痢症原因菌株の分子疫学的多型ならびに血清型別による解析

AU:　齊藤志保子, 八柳潤, 佐藤宏康, 白石廣行, 天野憲一

SO:　日本細菌学雑誌 57 巻 2 号 Page465-472(2002.05)

AB:　Campylobacter jejuni による 2 事例の集団下痢症患者より分離した複数の臨床株について血清型別(Lior 法及び Penner 法),restriction fragment length polymorphism-flaA(flaa-RFLP), パルスフィールド電気泳動(PFGE)を行い,比較した.fla-RFLP で標準株 29 株及び散発事例株 58 株を型別すると,6 タイプに分類できた.集団食中毒の第 1 事例分離株 4 株は Lior 型別で全て同一株を示したが,Penner 型別では 2 種の型を示した.fla-RFLP と PFGE による遺伝子型別では分離株が同一であった.第 2 事例からは 10 分離株が得られ,5 株はどの型別でも同一型を示した.次の 4 株は Penner と fla-RFLP では同一であったが,Lior では 2 種,又,PFGE では 4 株に微妙な違いがみられた.残りの 1 株は他の 9 株とは全ての型別で,異なっていた.以上により, 第 1 事例は同一株による集団感染,第 2 事例は少なくとも 3 種の C.jejuni による集団感染であることが強く推定された

【#0080】

TI:　【本邦臨床統計集】 感染症,寄生虫症　ウイルス性食中毒

AU:　染谷雄一

SO:　日本臨床 59 巻増刊 7 Page48-54(2001.11)

AB:

【#0081】

TI:　【本邦臨床統計集】 感染症,寄生虫症　細菌性食中毒

AU:　小花光夫

SO:　日本臨床 59 巻増刊 7 Page27-47(2001.11)

AB:

【#0082】

TI:　A 型肝炎患者より派生したと思われる食中毒事例の追跡調査　A 型肝炎ウイルスの遺伝子を指標とした検討

AU:　猿渡正子, 野田伸司, 所光男, 日置敦巳

SO:　感染症学雑誌 76 巻増刊 Page208(2002.03)

AB:

リスト1　医学中央雑誌検索結果

【#0083】

TI: 【事故と安全】 食品の微生物学的リスクアセスメント

AU: 山本茂貴

SO: 保健の科学 44 巻 3 号 Page195-198(2002.03)

AB:

【#0084】

TI: 最小二乗法と最尤推定法による集団食中毒の平均潜伏期間と曝露時点の比較検討

AU: 小池大介, 格和勝利, 緒方正名, 近藤芳朗

SO: 医療情報学 21 回連合大会論文集 Page581-582(2001.11)

AB:

【#0085】

TI: 【こんなとき先生ならどう対応しますか プライマリケア診療で困ったときに】 診断書・証明書・行政への届け出 結核-麻疹肺炎など入院するような感染症や食中毒が学校や職場で発生した際,保健所への届け出の判断はどうすればよいのか教えてください

AU: 葛西健, 橋本勢津

SO: 治療 84 巻 3 月増刊 Page1223-1226(2002.03)

AB:

【#0086】

TI: 分子疫学の初歩と病院感染対策 応用編 食中毒原因菌 O157,サルモネラ……食品汚染は世界の距離を縮めた

AU: 満田年宏

SO: INFECTION CONTROL11 巻 4 号 Page472-482(2002.04)

AB:

【#0087】

TI: 最小二乗法と最尤推定法による集団食中毒の平均潜伏期間と曝露時点の比較検討

AU: 小池大介, 格和勝利, 近藤芳朗

SO: 川崎医療福祉学会誌 11 巻 2 号 Page307-312(2001.12)

AB: 1993～1996 年まで全国で発生した O157:H7 によるもの 8 例,O118:H2 によるもの 1 例とサルモネラによるもの 1 例の計 10 例の集団食中毒の発生分布に対して,潜伏期間の分布に対数正規分布を仮定した最小二乗法による推定法,潜伏期間の分布にワイブル分布を仮定した最小二乗法による推定法と潜伏期間の分布に対数正規分布を仮定した最尤推定法による推定法の三つの方法により曝露時点・平均潜伏期間の推定を行った.その結果,最小二乗法と最尤

リスト1　医学中央雑誌検索結果

推定法の結果はどちらの方法が良いと優劣をつけることはできなかったが,潜伏期間の分布として対数正規分布よりワイブル分布を仮定した方が良い結果が得られることがわかった

【#0088】

TI:　1980～1995 年に東京都で発生したブドウ球菌食中毒由来コアグラーゼ VII 型黄色ブドウ球菌のパルスフィールドゲル電気泳動法による分子疫学

AU:　清水晃, 脇田義久, 五十嵐英夫

SO:　食品衛生研究 51 巻 12 号 Page45-51(2001.12)

AB:　パルスフィールドゲル電気泳動法(PEGE)を用いてコアグラーゼVII型黄色ブドウ球菌の遺伝学的解析及び疫学解析を行い,疫学マーカーとしての有用性を検討した.PEGE を用いることでVII 型に属する菌株を更に細かく分類することが可能であった.疫学解析より,同一地区で同じ遺伝子型の菌が 1 年或いは 2～5 年の周期で繰り返し食中毒の原因菌になっていること,同じ年に全く関係のない地域で同じ型の菌による事例が発生していたこと等が明らかとなった

【#0089】

TI:　乳児施設におけるノーウォークウイルス(NV)集団感染と 2000/01 シーズンの小児散発例の分子疫学

AU:　村田敏夫, 後藤裕子, 水田克巳, 村山尚子, 勝島矩子, 伊藤末志

SO:　山形県衛生研究所報 34 号 Page33-36(2001.12)

AB:　集団食中毒有症者の糞便 24 検体のうち,20 検体から NV の遺伝子が検出された.メニューの中にはカキは含まれておらず,食材からは NV の遺伝子は検出されなかった.又,調理従事者の糞便からも検出されなかった.ダイレクトシークエンス法により検出された NV の遺伝子解析を行ったところ,塩基配列が決定された 6 株の配列は全て同一であった.又,同一患者の検体から得られた PCR 産物についてクローニングを行い,7 株中 4 株に各々1 ヶ所ずつ変異を認めた.一方小児散発例から検出された NV の遺伝子解析を行った結果,五つのクラスターに分類され,集団発生のものとは複数株において塩基配列が一致した

【#0090】

TI:　【実践感染症新法】 私はこうする　診断・治療から届け出まで　食中毒

AU:　甲斐明美

SO:　最新医学 56 巻 9 号 Page1949-1956(2001.09)

AB:　経口的に摂取された細菌によって起こる疾病の中でも,食中毒は,2 類,3 類或いは 4 類に属する経口感染症とは区別される.細菌性食中毒を中心に,経口感染症との違い,病因物質,臨床症状,原因食品等について,その概略を示した.又,簡単な事例を挙げて診断の進め方,届け出方法,治療等についても記載した

リスト1　医学中央雑誌検索結果

【#0091】

TI:　感染症 Up to Date　岡山市で実施している危機管理研修が目指すもの

AU:　甲斐充

SO:　保健婦雑誌 57 巻 11 号 Page890-892(2001.11)

AB:

【#0092】

TI:　食中毒の病因物質と発生状況

AU:　熊谷進

SO:　Modern Media47 巻 7 号 Page181-187(2001.07)

AB:　毎年公表されている食中毒統計(発生状況)に含まれる疾病については,過去に何回か改訂が行われてきたが,伝染病予防法を廃止して「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」を施行するに際して,従来よりも一歩踏み込んだ改訂が行われ,新たに赤痢やコレラ等の疾病も加えられた

【#0093】

TI:　【食品衛生管理と HACCP】 食品安全を確保するための新たな方法とその取り組み

AU:　温泉川肇彦

SO:　公衆衛生研究 50 巻 2 号 Page70-74(2001.06)

AB:

【#0094】

TI:　【サルモネラ症の基礎研究の展開と臨床現場での実態】 食中毒細菌のファージ型別による疫学調査

AU:　泉谷秀昌

SO:　獣医畜産新報 54 巻 11 号 Page945(2001.11)

AB:

【#0095】

TI:　平成 12 年　食中毒発生状況

AU:　, 厚生労働省医薬局食品保健部監視安全課

SO:　食品衛生研究 51 巻 9 号 Page109-195(2001.09)

AB:

【#0096】

TI:　神戸市において発生した,牛乳に起因する黄色ブドウ球菌食中毒の統計学的解析

リスト1　医学中央雑誌検索結果

AU:　飯島義雄, 岩本朋忠, 仲西寿男

SO:　感染症学雑誌 75 巻 7 号 Page632(2001.07)

AB:

【#0097】

TI:　南方毒魚による食中毒防止に関する調査研究(第 1 報)

AU:　岡村俊則, 宮ノ下耕一, 西原充貴, 吉留吉弘

SO:　鹿児島県環境保健センター所報 1 号 Page81-82(2001.02)

AB:　奄美諸島において南方魚による中毒発生状況を聞き取り調査した.調査した全ての地域で南方魚による中毒が発生していた.中毒原因魚として,バラフエダイ,イッテンフエダイ,バラハタ,スジアラ及びウツボであったが,中でもバラフエダイによる中毒が多かった.ドライアイスセンセーションや関節脱力感,息苦しさ等の症状が多くの事例に見られた.中毒時の調理方法は,サシミ及び煮込みであったが,煮込みの方が重症例が多かった.又,地元では危険と言われる海域があった.摂食している人は,言い伝えにおり危険な魚かどうかを判断しているようであった

【#0098】

TI:　【EBM に基く臨床データブック】 症候の原因疾患頻度表　下痢

AU:　佐々木大輔

SO:　臨床医 27 巻増刊 Page937(2001.06)

AB:

【#0099】

TI:　鹿児島県における胃腸炎集団発生事例から検出された Norwalk virus

AU:　新川奈緒美, 吉國謙一郎, 上野伸広, 有馬忠行, 榎元磨加, 永田告治

SO:　鹿児島県環境保健センター所報 1 号 Page66-68(2001.02)

AB:　鹿児島県にて 1998 年 12 月～2000 年 3 月に搬入された胃腸炎集団発生事例 13 件の患者等の便及び食品計 131 件について,原因ウイルスの検索を行った.8 事例の便検体 39 件及び食品 5 検体から,Norwalk virus 遺伝子が検出され,遺伝子型は genogroup 2 が主流で P2-A と P2-B の混在であることが判明した.県内 5 地点に自生するカキについて N.virus 遺伝子の検索を行った結果,夏場でもカキの中に存在し,患者などから検出された遺伝子型と一致する遺伝子型を保有することがわかった

【#0100】

TI:　基礎医学から E 型ボツリヌス毒素産生性ブチリカム菌

AU:　中村信一

SO:　日本医事新報 4018 号 Page30-32(2001.04)

リスト1　医学中央雑誌検索結果

AB:

【#0101】

TI:　インターネットを利用した岐阜県下におけるサルモネラ症発生動向調査　Salmonella serovar Saintpaul による散発事例について

AU:　所光男, 山岡一清, 中川裕美, 飯沼宗和, 上田宏, 立木伸, 望月功二, 河合直樹, 佐久間芳三, 岩砂和雄

SO:　日本医事新報 4025 号 Page25-30(2001.06)

AB:　岐阜県では平成 3 年度からインターネットを利用したサルモネラ症発生動向調査システムの運用を開始し,6 月下旬～10 月にかけて我が国では報告の少ない S.saintpaul が 54 株と S.enteritidis の約 2 倍の頻度で分離された.S.saintpaul が分離された 43 例について実施した臨床像に関するアンケート調査の結果,S.saintpaul 症の臨床像は一般に症状が重い過去のサルモネラ感染症の入院例調査に比べるとやや軽いが,S.enteritidis 集団食中毒事例の臨床像よりは重い傾同が判明した.今回のようなサルモネラ症発生動向調査は散発サルモネラ症の監視,集団発生の前触れの探知,diffuse outbreak の発見等に有用であると考えられた

【#0102】

TI:　小学校の餅つき大会で発生したノーウォーク様ウイルス集団食中毒事例

AU:　宇宿秀三, 野口有三, 藤井菊茂

SO:　横浜市衛生研究所年報 39 号 Page87-89(2000.12)

AB:　小学校餅つき大会で発生した Norwalk-like viruses(NLVs)による食中毒事例について,疫学調査を元に EM 法による検索と RT-PCR 法による NLVs 遺伝子の検出を試みた.疫学調査の結果,3,4,5 年生の餅つきを担当した 6 年生・2 班の手返し或いはまるめの行程での汚染が疑われた.しかし RT-PCR 法においても汚染源を特定することはできなかった.一方,塩基配列の解析により Yuri 株に近い株であることがわかった

【#0103】

TI:　食鳥及び食中毒由来 Campylobacter jejuni のパルスフィールド電気泳動法による分子疫学解析

AU:　松根渉, 長宗学, 梅原成子, 岩崎由紀, 山田和枝, 杉山信子, 林賢一, 辻元宏

SO:　日本食品微生物学会雑誌 17 巻 4 号 Page245-248(2000.12)

AB:　1998 年に滋賀県内 3 ヶ所の食鳥処理場において食鳥 35 検体から各 1 株ずつ分離した Campylobacter jejuni(Cj)35 株,同年県内で発生した食中毒 3 事例の発症者 15 名・原因食品検体より分離した Cj16 株を用いパルスフィールド電気泳動法(PFGE)を用い Cj を分類し有効性について検討した.血清型が型別不能(UT)であった 16 株を含めて被検菌 51 株すべて PFGE による分類が可能であった.血清型別の結果より食品残品由来株と食中毒患者糞便由来株とが

リスト1　医学中央雑誌検索結果

同一由来であることが推測できた.PEGE は血清型が UT である Cj に対する解析方法として有効であることが示唆された

【#0104】
TI: 【私の処方 2001　小児薬物治療の実際】 消化器疾患の処方　細菌性胃腸炎・食中毒
AU: 豊田茂
SO: 小児科臨床 54 巻 4 号 Page566-572(2001.04)
AB:

【#0105】
TI: 化学物質情報へのアクセス-その 5 化学物質と環境情報
AU: 神沼二眞, 蕪山典子, 大竹千代子
SO: 食品衛生学雑誌 42 巻 1 号 PageJ8-J12(2000.02)
AB:

【#0106】
TI: 神戸市において発生した,牛乳に起因する黄色ブドウ球菌食中毒の統計学的解析
AU: 飯島義雄, 岩本朋忠, 仲西寿男
SO: 感染症学雑誌 75 巻臨増 Page107(2001.02)
AB:

【#0107】
TI: 散発発生食中毒疫学調査の考え方
AU: 土井由利子
SO: 食品衛生研究 50 巻 12 号 Page17-22(2000.12)
AB:

【#0108】
TI: 【今を読み解くキーワード集】 量的研究　積極的疫学調査
AU: 尾崎米厚
SO: 保健婦雑誌 56 巻 12 号 Page1076-1077(2000.11)
AB:

【#0109】
TI: 腸管出血性大腸菌 0157 の感染源,感染経路に関する研究
AU: 山岡一清, 中川裕美, 板垣道代, 南部敏博, 所光男

リスト1　医学中央雑誌検索結果

SO:　岐阜県保健環境研究所報 8 号 Page17-22(2000.12)

AB:　平成 8～11 年度に岐阜県内に分離された 0157 株 87 株について,パルスフィールドゲル電気泳動法(PFGE)を用いた遺伝子型の疫学解析および薬剤感受性試験を行い,感染源,感染経路の解明を試みた.PFGE の結果からは,家庭内感染であったことが実証できた事例,二次感染が疑われる事例,感染源が同じである可能性のある事例,県外の集団発生事例と,同一パターンを示した事例が確認できた.又,浄化槽における 0157 の消長実験を行った結果,浄化槽は,消毒操作が適切に行われない場合には,放流水を介して河川等への 0157 環境汚染の感染源になり得ることが示された.更に分離菌の PFGE を用いて DNA パターンの解析手法の 0157 以外の菌種への応用を,赤痢感染症,サルモネラ・ウェルシュ菌食中毒事例にも活用した結果,感染源,感染経路の解明の為の疫学的解析手段として非常に有用であることが確認できた.なお,平成 10 年,11 年に実施した岐阜県内の 8 河川から採取した河川水からは,0157 は検出されなかった

【#0110】

TI:　広島市域におけるイカ菓子を原因とした Salmonella Oranienburg 及び Salmonella Chester による Diffuse Outbreak への分子疫学的アプローチ

AU:　高垣紀子, 橋渡佳子, 伊藤文明, 児玉実, 石村勝之, 毛利好江, 河本秀一, 笠間良雄, 山岡弘二, 荻野武雄

SO:　日本食品微生物学会雑誌 17 巻 3 号 Page171-180(2000.09)

AB:　1997 年末よりサルモネラ属菌による散発的な食中毒事例の疫学的解析を行い起因菌株の動向把握を試みた.1998 年末よりサルモネラ O7 群の S.Oranienburg の漸増傾向が認められ,同時期にサルモネラ O4 群の S.Chester の増加もみられた.その発生は,青森県産イカ乾製品を起因とした S.Oranienburg による diffuse outbreak の発生時期と一致していた.本市での散発性食中毒とイカ菓子事例との関連性を究明するため,表現型別と分子疫学的解析手法である PAPD 法及び PFGE 法による遺伝子型別を併用して検討した.PAPD 法ではキット付属の 6 種類のプライマーの各パターンの組合せにより,由来の異なる S.Oranienburg は 4 群に分類され,S.Chester は 3 群に分類された.散発性食中毒事例株及びイカ菓子関連株にこの方法を適用した結果,多くは同一のパターンを示した.他の疫学的解析の結果と総合すると,散発性食中毒事例が,S.Oranienburg のみならず S.Chester も関与した diffuse outbreak 事例であったと考えられた

【#0111】

TI:　小児科学　食中毒原因究明のための疫学調査

AU:　柳川洋

SO:　小児科 41 巻 12 号 Page2187-2192(2000.11)

AB:　食中毒の原因を明らかにするための疫学調査の原則について,1996 年 7 月に大阪府堺市

の小学校で発生した大規模な病原性大腸菌 O-157 の集団発生を具体的な例として参照しながら述べた.基本的な食中毒原因調査の流れとしては,1)食中毒の発生と規模の認知,2)原因食品の探索,3)原因物質の探索,などがある.具体的には,聞き取り,立ち入り調査等によって,食材の調査,調理者の調査,調理状況の調査,容疑食品の販路の調査などを行う

【#0112】

TI: 【ラオス国 国際医療協力】 ラオスにおける細菌感染症の調査成績

AU: 仲宗根昇

SO: 琉球医学会誌 19 巻 3 号 Page145-153(2000.09)

AB: ラオス国立衛生疫学研究所と協同で行った細菌感染症の研究および疫学調査の結果を報告した.ラオスの病院で分離した黄色ぶどう球菌の薬剤感受性を琉球大付属病院と比較したところ,薬剤耐性パターンは明らかに異なっていた.3 年後の調査では前回認めなかった MRSA を検出し,薬剤耐性菌の監視強化の必要性が示唆された.またラオスで分離したコレラ菌は毒素産生能が高く,当地でのコレラ死亡率の高さとの関連が考えられた.腸炎ビブリオ食中毒菌の分析では特に側毛産生が強かった.ビエンチャン市の下痢患者の病原菌の分析では,赤痢菌が最も多く,次いで腸管病原性大腸菌であった.健康人の 211 検体からは 9 検体で赤痢菌が検出され,他のアジア諸国に比べて頻度が高かった.また下痢原因菌の 1 年間の年齢別傾向および変動は,他の熱帯国とは異なった特徴があった

【#0113】

TI: 食品の微生物学的安全性はどのようにして確保されているか 飲食物媒介感染症予防の行政対応

AU: 森田邦雄

SO: 日本食品微生物学会雑誌 17 巻 1 号 Page29-30(2000.03)

AB:

【#0114】

TI: 【内科疾患の診断基準・病型分類・重症度】 中毒 食中毒の診断基準・病型分類・重症度

AU: 相楽裕子

SO: 内科 85 巻 6 号 Page1629-1632(2000.06)

AB:

【#0115】

TI: 兵庫県下で発生したサルモネラ血清型 Enteritidis による集団食中毒 2 事例のパルスフィールド・ゲル電気泳動法による疫学的解析

AU: 浜田耕吉, 辻英高, 島田邦夫, 細田康彦

リスト1　医学中央雑誌検索結果

SO:　兵庫県立衛生研究所年報 34 号 Page113-117(2000.03)

AB:　H-小学校における食中毒 A 事例においては,用いた 3 種のマーカーについて検索した結果,給食ナムル分離株と患児分離株がいずれも同一のパターンを示した.このことからナムルが集団食中毒の原因食であることが明確になった.しかし,原因食ナムルに含まれるどの食品がS.E.に汚染されていたのかは,明らかではない.H-小学校の近隣小学校約 10 校の給食メニューは同一であり,かつ他小学校では食中毒の発生はなかった.鶏肉 4 検体から分離された S.E.は,用いた 3 種の疫学マーカー(ファージ型,薬剤感受性,PFGE パターン)のいずれも,ナムル及び患児由来株と異なっていた.事例 B おいては,分離された 7 株全てが同一の PFGE パターンを示した.本事例では,S.E.が分離された給食(三色巻き)の喫食日('98.2.24.)と患児(2 人のみ)の発病日(3.3.～3.4.)の間隔が 7～8 日と長く,三色巻きが直接の原因とは考えにくかった

【#0116】

TI:　ノーウォーク様カリシウイルスをパラメータとした環境分子疫学

AU:　川本尋義, 宇田川悦子, 山崎謙治, 杉枝正明, 池田義文, 大山徹

SO:　臨床とウイルス 28 巻 2 号 PageS33(2000.05)

AB:

【#0117】

TI:　胃腸炎由来 NLV の分子疫学的解析(1992-1999 年)

AU:　阿部勝彦, 池田義文, 山岡弘二, 荻野武雄, 野田衛

SO:　臨床とウイルス 28 巻 2 号 PageS32(2000.05)

AB:

【#0118】

TI:　食中毒事件情報処理システムの構築と活用

AU:　高橋正弘, 吉田芳哉, 赤堀正光, 浅井幸子, 佐々木健司, 志賀康造, 金子精一

SO:　防菌防黴 27 巻 11 号 Page733-738(1999.11)

AB:

【#0119】

TI:　最近の腸炎ビブリオ食中毒事情

AU:　島田俊雄, 荒川英二

SO:　防菌防黴 28 巻 3 号 Page157-167(2000.03)

AB: